第２回　鶴岡市文化芸術推進基本計画策定委員会　会議録（概要）

日時：令和元年１１月２６日（火）
午後２時～３時３０分
会場：鶴岡アートフォーラム大会議室

［出席者］
委　員：太下義之氏（アドバイザー）上野由部氏、遠田達浩氏、鈴木郁夫氏、東山昭子氏、酒井英一氏、後藤洋一氏、平智氏、佐藤豊継氏、黒澤由希氏
幹　事: 阿部真一企画部長、齋藤秀雄福祉課長、阿部知弘観光物産課長、尾形圭一郎学校教育課長
事務局：布川敦教育長、石塚健教育部長、鈴木晃教育委員会事務局参事、佐藤嘉男社会教育課長、佐藤尚子文化主幹、三浦裕美文化財主幹、坂田英勝芸術文化主査、五十嵐恭子芸術文化主査

◆協議
１．第１回策定委員会の協議を受けて
（１）領域の整理について/鶴岡の特色について（委員作成：別紙）
（２）グループトーク・アンケートの実施
（３）庁内関連事業リストの整理
２．方向性・重点項目の整理（中間報告）

（事務局　協議１　説明）
○委員：今の説明は、鶴岡の文化及び芸術をどうとらえていくかという部分だが、事前提出をお願いした「鶴岡の特色について」の文書の説明もお願いしながら、鶴岡の文化、芸術を含めて鶴岡の特色は何かというところを委員から伺いたい。

○委員：私は「沈潜の風と継承の粋」とした。「継承の粋」は、今回あえて作ったキーワード。鶴岡の現状や江戸時代のご当主が今もご家族でいらっしゃること、黒川能とか、事物をひたすら継承していく美学がこの地にはある。同時にそれを「沈潜の風」として宝がありながらも、声高に自慢しない。どっしりと構えている気風がある。強いて芸術文化を推進する観点からは「沈潜の風」があるがゆえに、地域ブランド、文化的なアピールが不足しているのではと思う。これだけ魅力がありながら全国的にみれば有名ではない。「沈潜の風」でいいというスタンスもあるが、文化芸術推進の計画を考えていくと、

もっと PR して鶴岡の文化を学びにくるような、循環を作っていくこともありだと思う。

○委員：高等学校の文化部という視点で書かせていただいた。鶴岡は合唱を中心とした音楽で歴史、伝統があると感じている。学校では「シルクのチカラ」として鶴岡市の主催で、鶴岡シルクを題材にファッションショーをさせていただいた。生徒たちが鶴岡の魅力に触れて一般の皆さんにもお知らせする、地元の良さを感じ取る機会を設けさせていただいているということが有難かった。

○委員：小学校の頃にへらへらしていると父親から「お前、沈潜の風を知っているか」と言われて怒られたことがあった。その頃は言葉の意味も分からなかったが、鶴岡で生まれた子として大事なことを言われているという意識はあった。「沈潜の風」という言葉が好きで大きくなってきたつもり。それと、四季がはっきりしていることは、特に生活、文化等をつくるとき鶴岡のいろいろなものに影響を与えていると思う。小学校の教科書でも、社会では庄内平野が出ているし、理科の教科書にも四季がはっきりしている山形県が出ているので、日本全国でも恵まれた、地球上でも限られた位置にいる。そこから連綿とつながれてきた様々な文化が大事にされて現在でも残っている。教師として転勤するが、学区ごとに大事にされてきたものが違うし、豊かな大切なことが残っていることを強く感じる。高専や大学が誘致され整備されてきた考え方、先人たちの積み重ねもある。

また、特別支援学校など共生するための教育機関が鶴岡の中にはあることも、やはり教育が大事にされてきたことなのではないか。来年の（オリパラに）向けてのドイツから来たボッチャチームの方とお会いしたが、高い志をもって、ホストタウンの鶴岡と交流されているのを見ると、共生社会は大事なキーワードになるので、今回の計画がそこにも効果のある計画になるのではないかと思っている。

○委員：鶴岡の特色を考えると土地柄とか、鶴岡の「風（ふう）」ということに置き換えられる。学問、教育が大切にされてきたのが一番の特色だと思う。今でも藩校致道館の教育の一部を現在の学校教育に活用しているが、明治２３年には奥羽人類学会がこの鶴岡の片田舎、一地方に創立され、学究的な活動が約１１年間続いた。会長が松森胤保で中心的なのは、羽柴雄輔（ハシバ ユウスケ）※という者だが、毎月定例会を開いたほか県外にも地方委員を置いて活動していた。これは非常に大きいことだったと思う。その後は、羽柴雄輔もそうだが、いろいろな研究していた人たちが慶應大学の図書館に資料を寄附したので、慶應の図書館では昭和の初期まで庄内研究会という研究会を開いていた。戦後、学術の発掘調査は山形県でも鶴岡、庄内がいちばん最初だった。その後も民俗、民具の調査も盛んで、鶴岡には庄内民俗学会があり今も活動している。鶴岡は実は公民館活動も盛んで、戦後間もなく文部省から公民館設置の通達があって鶴岡がいち早くそれに取り組んだ。今でこそ全国的に教育や学問は大切だと言われているが、戦後間もな

くこの鶴岡がいちはやく取り入れている。また山形大学の農学部や高専など国の高等機関が設置され、最近は慶應の先端生命科学研究所ができている。様々な意見があるが、教育が一番大事だと思っているので、（教育機関の集積が）行われたと思う。

※羽柴雄輔:1851～1921　史料研究家。各地の小学校に勤務し、早くから松森胤保について博物学を研究し、明治23年に松森胤保を会長として鶴岡に奥羽人類学会を組織した。その後、慶應義塾大学図書館に勤務し在職中に東京で没した。(「庄内人名事典」から抜粋)

○委員：酒田市、新庄市あたりと比較してだが、学習に価値を、重きを置かれる方が多いように感じる。二つ目は新しく入ってきたものに対し、隣の酒田市はまずそれを取り入れてみるということがあると思うが、鶴岡はじっくり吟味をした後にやるところがあると思う。皆さんがおっしゃっていることに私の意見も当てはまる部分があると思った。

○委員：（鶴岡を表す言葉として）不易流行という言葉がある。不易は、大事なものは手放さないでじっと守っていくことなので、変わらないものは変わらせないという部分。だから民俗芸能もきちんと残されていて貴重な文化遺産になっている。もう一つは流行ということで、新しいことを取り入れるのにそうそう臆病じゃないということ。どんどん新しいものが入ってきている。だが、専門家はレベルが高く、学校教育、社会教育、芸術の各分野でも相当のものなのだが、少子高齢化社会の中で、相乗的に協力しないと力を発揮しえなくなっている。山形県で文化とスポーツと観光の課が一つになったときは、何を考えているのかと思ったが、地域づくりに必要なお互いの力を貸しあいながら、人を呼び、交流人口を増やし、ここで生きていてよかったという文化を残すには必要な形だと思う。

○委員：福祉を仕事にしているが、自慢しない鶴岡の気風をある先生から「物言わぬ農民だ」と言われたことがあった。悪い意味ではなく、地道にやっているという評価だった。じつは私の地域では明治時代の先人たちが北前船の模型を作り、それを子どもたちが秋まつりで引くという文化をもっている。これはすごいことだと地域で話をしたことがある。そう考えると、もっと拾い上げるものが一杯ある。鶴岡の中でもう少し、整理をし、発信をすることが必要かなと思っていた。もう一点、ボランティア活動の啓発や推進を仕事としている中で、全国から来た方に鶴岡、庄内について「公益」ってすごいと言われたことがあった。歴史的にも公益的な部分で活躍した先人の方々がいらっしゃると聞いている。ここにはそういった気風もあるので「公益」という言葉もこだわりがあるのかなと思った。公民館活動の話もあったが今のコミュニティを考えたとき、これまでの公民館活動の中にも文化伝承のヒントがある。その一つが人づくりだと思う。公民館活動は人を作ってきた。人づくりという視点から公民館活動で若者が活発に活動していた。そういったものを鶴岡の人は培ってきたことも改めて感じた。

○委員：鶴岡の文化芸術の特色を考えると、「奥の深さ」だと思う。奥の深さは「沈潜の風」とも関連していると思うが、過剰に干渉しないことが大きな要因になっていると感じる。情報発信の時代に自慢も含めて、その方向に行き過ぎると、奥の深さが担保されない心配もある。いろんな方とお話をしていると、そんなことまでやっているのですか、ということもあるし、膨大なコレクションをもっている方に出会うこともある。常に驚きがあるというか、発掘中であるというか、そういうことを長く続けられるような、仕組みも大切だと感じる。過剰干渉しない、支援しすぎないということも奥の深さと無関係でないと思う。

○委員：海外から観光で鶴岡に来る人には、街がきれいでごみ一つ落ちていない。それから例えば、食文化だと料理長が材料から作り方から懇切丁寧に説明してくれる。対応してくれる人がみんな優しいということを共通して言われる。なぜこれまで外の人にそう言われないのかと考えると、みんな庄内を知らないからで「沈潜の風」もあるが、一人ひとりが友達、地域外の友達に（鶴岡の良さを）自慢していってもいいのではないかと感じた。旅行業では、観光、交流で鶴岡に来てくださる方を増やさないといけないが、多くの方をひきつけるものが多々あるので、住んでいる人間が理解して分かることも重要だが、外から分かるよう発信していくことも大事だ。本質を外さない範囲できちんとストーリーを描く中に、様々な連携の姿が生きてくるのではないかと感じた。

○委員：ひと通り皆さんから意見をいただいた。最終的に文化と芸術を言葉として焦点化していかなければならないが、なぜ鶴岡ではその言葉を選んだのかという理由づけをしっかりすることで、鶴岡の特色を表していけると思う。今までの意見で鶴岡の人は「学び」がやはり好きなのだろうと思う。学ぶことで、自分の文化価値、生活感がレベルアップする、レベルアップしたところに、芸術性のあるものが入ってきたとき、その芸術的な価値はやはり高くなっていく。鶴岡は、学ぶことが好きな故に文化を超えて専門性のある芸術が高まっていっている地域なのではないかとも言えると思う。しかし、委員の発言にもあったが、一つの分野だけでは生き残れない時代になってきている。それをどうするかといったとき、皆様方から言葉としては、文化がいいのか、文化芸術がいいのか、というところは最終的には結論づけていただきたいと思う。その前提として皆様方からいただいた意見をまとめて、理由づけを作り上げていきたいと思う。

○委員：鶴岡の特色を考えると、これまでの過去を考えて特色とおっしゃると思う。もちろんこれまで積み重ねてきたものがあるから今がある。ただその時点で見ると、両刃の刃になるところもある。なので、皆様が出した特色を抽出して、未来がどうなっていきたいか、があるとどうかと考えた。例えば人づくりの観点にしても、三つの切り口の対象、３のところにしても、価値観、鶴岡が未来へどのような価値観で進んでいくかとい

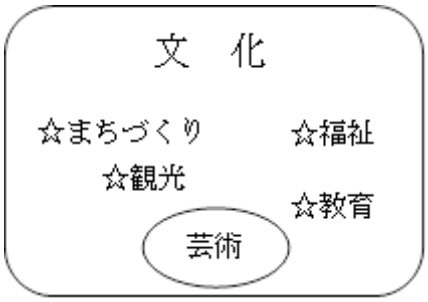
うところをこれまでの鶴岡の特色から抽出して、再構築していかないと、どんな人づくりをしていったらいいのか、対象もこの分け方だと全員になる。そうではなく、文化芸術を推進するとき、どのような価値観で行うと考えがあてはまるのかというふうにいくほうが、マッチするのではないか、撹拌しないのではないか、と思った。

○委員：相反する形で詰めていくと、譲れない形で強くそこが強調される。発信力のなさとか、あるいは、やわらかさというような部分を逆に言えば、内にこもって外に出ないとか、他人への批判力だけにとどまるという形になるので、今のご意見のように、こうありたい形から、照射していくというか、そういう部分で出てくるものがあると思う。譲れない形で専門化されていくよりも、あったほうがいいという、形で進められるといい。

○委員：若者の力を借りながら、未来志向の中の鶴岡、というところが間違いなく必要な部分だろうと思う。文化芸術について二回とも皆さんから様々な意見をいただき、鶴岡の特色についてもお話ししてもらった。その中で、まず言葉は「文化芸術」でいいのではないか。と思う。言葉は「文化芸術」ということを踏まえて、その理由づけとして鶴岡の文化芸術の未来を志向する、理由づけを考えていく、というまとめでどうか。

○委員：こだわるわけではないが、文化芸術という四文字熟語はあまり一般化していないと思う。文化・（なか点）芸術という理解でいいのか。文化プラス芸術という共通理解がないと、文化芸術という四文字熟語だと何かずれるような気がする。

○委員：図をご覧ください。芸術があって、文化という概念はそれより大きい。芸術は文化の中に入っている。ならば言葉として文化でいいのではという理屈になるが、文化だけだと、芸術という観点が見えなくなってしまう。本来我々がイメージしたいものよりも広く、行政が扱うにはふさわしくない領域まで全部イメージされてしまう。なので、国としては法律を作るときに「文化芸術」という一つの新しい造語を作った。一般化していないと言われたが、一般化している。「文化・芸術」と中点（なかてん）を入れると文化と芸術を分けることになる。文化と違う芸術を規定するという積極的な意思表示になる。その場合、国とは違う文化と芸術を鶴岡で規定しなければいけない。文化芸術という四文字熟語は昔からある言葉でないので違和感があるのは分かるが、そこに落ちつけておくのがいい。



もう一つ申し上げたいのが、今議論しているのは、行政としての基本計画の領域の話。皆さんの共通認識だと思うが、領域について「これはない」というのは多分ないと思う。

基本的に広く考えている。人の心の中まで行政が介入することはないが、国が言っているのと同じような広い範囲で考えていいと思う。ただ先ほどある委員がおっしゃったように、未来のことを考えたときにどうするか。鶴岡らしい計画という観点もあるし、現実的な話として、文化と芸術すべての領域をやっていくのは、財政的にも難しい。実際的にはどういう部分を鶴岡は重視していくのか、次の議題はそこになる。さらに申し上げると、国が定めた文化芸術基本法の精神というのが、前回もお話したが、前の法律から変わった時に、「文化芸術振興基本法」から振興の二文字が消えて「文化芸術基本法」になっている。国としては、文化芸術の振興だけでなく、文化芸術が幅広い、他の政策領域、まちづくりや福祉だとか、教育とか、様々な領域とかかわっていくんだということを法律の中に書いている。実際に我々が方向性、重点項目の整理で検討するべきは、この部分（図の☆）になる。ここにも目配せしながら、何を鶴岡らしい重点的な計画にしていくのかになる。言葉の問題だが、文化と言ってしまうと、あまり広すぎて、芸術が見えなくなってしまう、文化と芸術とすると文化と切り離された芸術というものがあるような気がするので、文化芸術でいいのではないかと思う。

○委員：我々も生活の中で様々な文化的な活動をしている。その中で高度化していったものが、特出して世の中で認められた時に芸術家ととらえられる方が多いと思う。そうすると、芸術を生むのは文化になる。だから、文化芸術という言葉でよろしいのではないかと思った。文化芸術という言葉で計画をとらえるとことでよろしいか。

（異議なし）

ではそのように決定させていただく。同時に事務局には文化芸術という言葉が出てきた背景と、理由づけしたものを明確にしていかなければならないので、今まで出てきた意見の中からまず作成してもらいたい。またそこで議論しあえればありがたいかなと思う。今まで出てきたのはほとんどが歴史を踏まえた中で鶴岡の特色が出てきた。まずここは踏まえながらも、未来志向という意見もある。鶴岡の方向性として大切なものがあると思う。いいところを延ばそうというものを見出さなければならない。同時に鶴岡に足りないもの、これがあると、もっとおもしろいという分野もあるだろう。そこを探っていかないといけない。そういう未来志向の理由づけがまず一つ必要だと思う。そこをまとめるところは欠かしてはいけないと思う。

第２の協議を事務局のほうから説明をいただいて、残り時間があれば協議をいただきたい。

（協議２の説明：事務局）

○委員：事務局から、三つの観点から方向性を示していだいた。中間報告ではあるが、ご意見をいただけるとありがたい。

○委員：いろいろな活動があるが、どのような形で連携すれば、活性化につながるのか、今、別々にやっていることが、市民全体の文化的な活動の分野に発信されていくことは少ないが、「シルクのチカラ」など全市的なイベントになると、市民参加ができる状態になっていく。支えていく力と進んでいく力が融合して進むところが見えてくるといい。市民の活動ばかりでなく、関係機関の関わりも見えてくるといい。

○委員：市民の方からの意見や感想は行政として見落とすわけにはいかないと思うが、全部をプラスに拾い上げるのも現実的でない。ある程度丁寧に説明していく視点が必要だと思う。施設の使用料が高いとか、いろいろあるが、文化芸術を推進していくため、市民の方に活用してもらうために、このように拡げます、それと同時に丁寧に伝えていく仕組みも入れるといいと思う。二つ目の連携は軸を何処において、その軸を基にした連携を進めるというものがないとどの活動も個性が強いし、いいものなので、個性の強いものを見失ってしまう部分がある。軸を定めるというか、方向性を定めると良いと思う。

○委員：「シルクガールズ」のプロジェクトには福祉がコラボしている。施設に通所している知的障害の方々の社会参加をクローズアップされるように、シルクガールズの方々がデザインしたドレスを着てファッションショーに出た。たまたま生徒たちが施設でボランティアをしていて、こういうことをやっているという話を施設の職員が聞いてこの通所者も参加できないかというところから、話が始まった。どこもコーディネートしたわけでなく、話がつながった。ボッチャも障害者の方々のスポーツだが、子どもたちの交流や、福祉施設のおじいちゃん、おばあちゃんとの交流がある、それをどこがコーディネートするか、連携、交わりというところをどういうふうにこの計画で落とせるのかと思った。

○委員：イメージは、基本計画だが読むと、中学生、高校生でも鶴岡の文化芸術の現在、過去、未来が分かるというような仕立てに何とかならないかと希望している。活性化、連携、しくみづくりというのが、KJ 法も使ったまとめから出てきたキーワードだから間違いがないと思う。でも仕立てとしては、鶴岡の文化芸術の歴史があって、現状がこうで、それを考えるときに、将来に向けて活性化が必要で、そのためには連携という方向性が大切で、それを推進する仕組みづくりが大切だろうという構造になっていると思った。そう考えると章立てもある程度見えてきて、過去、現在、未来と言ったほうがいいかもしれないが、そういう整理もできると感じる。

○委員：計画の方向性が具体的に見えるための素材としての鶴岡の歴史であり、現状であり、未来であるということが分かりやすく表現できるところから発信して、活性化するには見えるところからどう持っていけばいいのか。連携も仕組みもそういうことだと思

う。どうするとスムーズにいくか、ここが、一番重要だと思う。ここは次回に協議していきたい。時間制限で意見がいただけない方がいらっしゃると思うが、ぜひ用紙を活用いただき、お考えを寄せていただきたい。